新藤兼人賞
SHINDO KANETO AWARDS

第２１回新藤兼人賞

2016 年 12 月 2 日（金）如水会館２Ｆ オリオンルーム

主催： 協同組合 日本映画製作者協会

協賛：松竹株式会社/東宝株式会社/東映株式会社/株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ/日活株式会社
日本映画放送株式会社/株式会社ＷＯＷＯＷ/株式会社ＩＭＡＧＩＣＡ/株式会社ファンテック

金　賞

中野量太『湯を沸かすほどの熱い愛』監督・脚本

受 賞 者 コ メ ン ト

「９年ぐらい前にこの場所に来たことがあります、見学に。……金賞、銀賞が輝いていて、いつかあの舞台に乗られたらなと思いました。新藤兼人賞は、プロデューサーが選んでくれる賞……（言葉につまる）ダメなんです、こういうの……この賞はプロデューサーの方から選んでいただけるということで、僕にとっての……（号泣）ダメだ。ちょっと時間をください。椅子に座っていいですか（銀賞受賞の小路監督にトロフィーを渡して着席）。
僕にとってのプロデューサーは、心から信頼している存在だと思っています。たとえ僕が失敗しても見捨てないだろうなっていう……チクショー！（涙）。僕は監督してたのですけど、２年位で挫折して一回ドロップアウトしてしまって……その中でも、ずっと僕を支えてくれるプロデューサーがいました。でも、どうしても僕が映画を撮りたくて、自分で 100 万円ためて、それを持っていって「一緒に映画を作ってください」と言いました。何の保証もない僕に、一緒にお金を出して作ってくださった映画が『チチを撮りに』（長編１本目となる前作 13 年）という映画です。それを評価していただいて、今回『湯を沸かすほどの熱い愛』のプロデューサーが「オリジナルで作ろう。オリジナル、中野君やろう」という風に言ってくれました。それも言ってしまえば、なんの保証もない今オリジナル映画で新人の僕が撮ったって興行的にどう勝負できるか保証がない中で、僕を信じてやってくれました。だから、どうしても恩返ししたくて、懸命に、懸命に作りました。だから僕にとっては、プロデューサーは心からこの人のためにやりたいという関係性を作れたひと、それが僕にとってのプロデューサーです。前回の『チチを撮りに』も今回の『湯を沸かすほどの熱い愛』も僕を本当に信じてくれました。だから多分この賞をいただけたことを僕と同じくらいみんな喜んでくれていると思います……それが本当に僕はうれしいです。僕が思うのは、映画はプロデューサーがいないと成立しません。そんな方々が選んでくれたこの賞は、僕の誇りです。本当に嬉しいのです」

受賞者プロフィール　1973 年生まれ、京都府育ち。大学卒業後、日本映画学校に入学。卒業制作の『バンザイ人生まっ赤っ赤。』(00)が日本映画学校今村昌平賞、TAMA NEW WAVE グランプリなどを受賞。卒業後、助監督やテレビディレクターを経て 6 年ぶりに撮った短編映画『ロケットパンチを君に!』(06)が、ひろしま映像展グランプリ、長岡インディーズムービーコンペティショングランプリ、福井映画祭グランプリ、水戸短編映像祭準グランプリなど 7 つの賞に輝く。08 年には「ndjc:文化庁若手映画作家育成プロジェクト」に選出され、35mm フィルムで制作した短編映画『琥珀色のキラキラ』が高い評価を得る。その後、『チチを撮りに』(12)が、第 9 回 SKIP シティ国際 D シネマ映画祭にて日本人初の監督賞を受賞、第 63 回ベルリン国際映画祭正式招待を皮切りに、各国の映画祭に招待され、第 3 回サハリン国際映画祭グランプリなど国内外で 14 の賞に輝く。本作が商業映画デビュー作となる。

銀　賞

小路紘史『ケンとカズ』監督・脚本・編集

受 賞 者 コ メ ン ト

「僕も泣く準備をしていたのですが…。あらためて、この賞をいただいて光栄です。この映画は、本当に小さいところから始まった映画なんですけども、本当にたくさんの方々の応援でこの場に立つことが出来ています。今日も来ていただいているのですけども、東京フィルムセンター映画・俳優専門学校というところで僕は映画を勉強して、この『ケンとカズ』を作る時も、機材協力や（撮影の）人員を助けていただいて、宣伝も協力していただいて本当に感謝しています。それだけではなくて、スタッフやキャスト、特に『ケンとカズ』のカメラマンはいとこのカメラマンなのですが、山本周平という２歳上のお兄ちゃんのような存在の人がスタッフとして入ってくれたので、ここまでやってこれました。そしてキャスト……『ケンとカズ』のタイトルロール（主演）をやってくれた、カトウシンスケと毎熊克哉には、本当に４年間、付き合ってもらって、感謝しても感謝しきれないくらい感謝しています。ここではいえないくらいの沢山のひとたちの応援でこの作品ができました。その人たちの為にもこれからも頑張っていこうと思います。この賞、本当に光栄です。本日は本当にありがとうございました」

受賞者プロフィール　1986 年生まれ。広島県出身。東京フィルムセンター映画・俳優専門学校を卒業。10 作品以上の短編映画を制作。4 年連続でショートショートフィルムフェスティバル＆アジアで入選を果たすなど、日本・海外の映画祭で上映。2011 年に制作した短編版の『ケンとカズ』は、SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2011 で奨励賞を受賞し、ロッテルダム国際映画祭 2012 をはじめ、リスボン国際インディペンデント映画祭 2012 などで上映されるなど、海外からも注目される。本作が長編デビューとなる。

＜短編フィルモグラフィー＞『23 話目』(08)ショートショートフィルムフェスティバル＆アジア 2008、リオデジャネイロ国際映画祭 2008。『運び屋』(09)ショートショートフィルムフェスティバル＆アジア 2009。『海の見える場所』(10)ショートショートフィルムフェスティバル＆アジア 2010/アシアナ国際短編映画祭 2010。『BONSAI』(10)。『ケンとカズ』短編版(11)ショートショートフィルムフェスティバル＆アジア 2011、スキップ CITY 国際 D シネマ映画祭 2011 奨励賞受賞、ロッテルダム映画祭 2012、リスボン国際インディペンデント映画祭 2012、NIPPON CONNECTION2012。『入れ歯』(12)

プロデューサー賞

川口典孝『君の名は。』製作

受賞者コメント

「受賞のきっかけになった『君の名は。』なんですけども、新海誠監督とは１５年前に会いました。彼は２８歳、僕が３２、３歳かな。僕は当時、商社からの出向で働いていたんですが、何か巻き込まれて、気が付いたらアニメ会社の社長になっていた。彼は、そういう力を持っていて、１人ずつ巻き込んでいくんですよね。１５年来、僕は『新海と川口二人三脚』と言われて来たんですけど、１５年の間に新海を支える仲間が１人増え２人増え…今は三十人三十一脚になってました」なので、今日はですね、これ僕の名前でいただいているのですが３０人を代表して受け取っているものと思っております。
『君の名は。』ですけれども、ここまでヒットするとは、誰も思っていませんでした。新海も、僕も、東宝さんも、思っていなかったと思います。それがたくさんの方に見ていただけて、また業界関係の方にも観ていただけて、そして、こうやって評価されて、賞までいただけて、本当に光栄でございます。ありがとうございます。これからも新海誠は頑張っていきますので、よろしくお願いいたします」

受賞者プロフィール　コミックス・ウェーブ・フィルム代表取締役。
1969 年、東京出身。93 年、青山学院大学経営学部卒業後、伊藤忠商事に入社。98 年、旧コミックス・ウェーブの設立と同時に出向、その後取締役に就任。03 年、伊藤忠商事より転籍。07 年、旧コミックス・ウェーブから独立しコミックス・ウェーブ・フィルムを設立。同社では、アニメーション作品の企画・製作・配給・パッケージ販売をはじめ、海外セールス、作家のマネージメント、版権管理まで行っている。

＜主な作品歴＞
プロデューサーとして:『雲のむこう、約束の場所』(新海誠監督 04)、『秒速 5 センチメートル』(新海誠監督 07)、『星を追う子ども』(新海誠監督 11)、『言の葉の庭』(新海誠監督 13)、『君の名は。』(新海誠監督 16) エグゼクティブプロデューサーとして:「Peeping Life」シリーズ(森りょういち監督作品 08~)、「この男。」シリーズ(山本蒼美監督作品 11~)

金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：岡田裕（アルゴ・ピクチャーズ）

この新人監督賞の審査の基準は、去年の 12 月 1 日から今年の 11 月 30 日迄の間に日本で公開された映画の中で、劇場公開映画の製作経験が 3 本以内の監督の作品を対象にしています。600 本前後の作品が作られた今年の日本映画の中で、実に 180 本が今回の審査の対象となりました。ここ数年、新人監督の製作した映画が増えていますが今年は特に多かったようです。撮影機材やポストプロダクションのデジタル化によって、新人監督が映画製作の現場に登場しやすくなったのが一つの要因だと思いますが、それにともなって質の面で日本映画界に新風を吹き込んでくれたかどうか、そのことが我々の審査の基準でした。利益追求中心の映画業界の中で、新人監督に期待されるのは、やはり、今まで見たこともなかった新しい人物像の創作であったり、新しい映画的表現であったりします。その点でも今年の対象作品群はレベルが高かったと思います。180 本の対象作品の中で予備審査を経て約 20 本の作品が審査委員会の議論の対象となり、プロデューサーである各委員はそれぞれの映画観に基づいて激しく議論を戦わしました。今年の対象作品の一つの特徴は、作品の中身が実に多様であったことです。ヒリヒリするような暴力を追い求める作品(『デストラクション・ベイビーズ』真利子哲也監督)、都会的でしゃれた大人のラブコメデー(『友だちのパパが好き』山内ケンジ監督)、女性だけのアングラ劇団の劇を作る過程でのすさまじいエネルギー(『過激派オペラ』江本純子監督)、どれをとっても我々独立のプロデューサーにとって魅力ある才能でした。映画界が多様性を持っているということは、業界の発展のためにも実に重要なことだと考えます。映画産業はビジネスですが同時に文化であるとも思います。コンテンツ(情報)プラスワン(創意)があって初めて映画産業は継続していくと思うし、常に質を高めること(新しい創作性)が求められていると思います。そういう視点で私たちは今回自信をもって金賞に『湯を沸かすほどの熱い愛』の中野量太監督、銀賞に『ケンとカズ』の小路紘史監督を選出しました。両監督ともに、これからは、映画に投資された資金の回収のための様々な制約の中で仕事に立ち向かうことも多くなると思いますが、どんな条件の下でも創意を忘れずに作り続けてもらいたいと思います。

進藤淳一（フイルムフェイス）

普段は見る機会が少ない作品をあえて見ることができるのもこの審査員を引き受けた楽しみの一つである。今年は見ごたえのある作品がたくさんあってとても楽しい年になりました。私見ではありますが今年は中野量太監督『湯を沸かすほどの熱い愛』の金賞は直ぐに決まりました。脚本もよく練られており心憎いほどの計算がうまくいっていると感じました。試写室で久しぶりに泣きました。銀賞の『ケンとカズ』はとてもオーソドックスな感じで古いという方もいましたが私は大好きな作品です。
他にも山内ケンジ『友だちのパパが好き』、横浜聡子『俳優 亀岡拓次』、真利子哲也『ディストラクション・ベイビーズ』等もかなり頑張っていて次回作以降にも期待が持てる監督だと思いました。江本純子『過激派オペラ』を含めて銀賞は決まるまでにかなり時間がかかりましたがそれほどにそれぞれの作品の力が拮抗していたのと各審査員の考えがいろいろあったのだと思います。残念ながら受賞できなかった監督たちは我々審査員に見る目がなかったと思いこれからも創り続けてさらに大きくなって私たちの鼻を明かしてください。最近邦画もヒットする作品とそうでない作品の差がはっきり出るようになってきているように思います。そしてある程度のヒットをしないと次回作につながらないのも現実です。毎年たくさんの新人監督作品が創られていますが先ずは創り続けることそして一人でもたくさんの人に見てもらい楽しんでもらうのが映画の本質だと思うので 1 本でも多くの作品を創り続けてください。中野量太さん小路紘史さん新人監督賞受賞おめでとうございます。近いうちにご一緒できることを願っています。

孫 家邦（リトルモア）

最終選考で残った 5 作品の中で、江本純子さんの『過激派オペラ』を推した。劇団主宰者である主人公が劇中で行う旗揚げ公演の作品名がそのまま映画のタイトルになっているのだが、その勇ましい感じとうらはらにこの作品は瑞々しい感覚にあふれた青春ドラマの傑作だった。明日も知れぬ不安と、それに抗うように、気儘に振る舞う女主人公を見ているうちに、なぜか阪本順治監督のデビュー作、『どついたるねん』の赤井英和を思い出した。あの映画に具わった(現実的な肉体の)痛みの欠落が、いささか観念的な「痛み」と受け取られたのか、審査会では票が集まらなかったが、様々なジャンルを越境しながら作品を発表し続ける江本さんの「浮遊性」も含め、私は最上位の評価をした。金賞の『湯を沸かすほどの熱い愛』には、語り口のうまさに舌を巻いた。が一方でその「うまさ」に大きな違和感を感じた。銀賞の『ケンとカズ』についてはある水準を軽々と超えていく確かな描写は小気味良いのだが、人物アップのカット多用、音楽の過剰を含め、現状やりたいことを全てやっただろう監督のこの先の表現で評価すべきではないだろうか、と強く思った。真利子さんの『ディストラクション・ベイビーズ』は興味深く観た。「あっ、この監督の映画と恋愛の仕方、ちょっと分かるなぁ」と思った。ときに雄々しく、ときに不様で、これもまた真っ当でありながら変格的な「青春映画」なのだ、と感じたのだ。

豊島雅郎 （アスミック・エース）

今年度の新藤兼人賞(新人監督賞)候補作品数は過去最高となる 180 本でした。金賞の中野量太監督『湯を沸かすほどの熱い愛』は審査員 5 人中 4 名が推した異論が少ない中での断トツの受賞となりました。銀賞の小路紘史監督『ケンとカズ』は議論を重ねに重ねた上で審査員 5 人中 3 人の過半票を得て決まりました。そんな中、私は山内ケンジ監督の『友だちのパパが好き』を推しました。同監督の早くもの第三作目『Attheterrace テラスにて』は、この 11 月に一週間限定でレイトショー公開され、年明けにはロードショー公開が予定されているとのことです。小生は山内監督を日本映画界でもっともっと評価されるべき才能の一人だと考えておりますので、その最新作を一人でも多くの方がご覧になることを願って止みません。さて、今年度の金賞・銀賞に戻りますが、中野監督の『湯を沸かすほどの熱い愛』には、これでもかこれでもかと催涙ポイントを埋め込んだ緻密な脚本とベテラン俳優に対しても物怖じしない演出に唸りましたし、小路監督の『ケンとカズ』には、瑞々しい若手役者に対する的確な演出力とそれを掬い取り切ったカメラワークに脱帽しました。最後に、中野監督・小路監督共に、できるだけ時間を置かず、映画ならではの大きいスクリーンで観る者の感情を鷲掴みにしてその後の人生をも変えてしまうような、ワクワク・ドキドキする次回作を世に産み落としてくださることを心から期待しています。

利倉亮（レジェンド・ピクチャーズ）

人気の写真家たちや韓国のプロデューサーA と酒を飲んだ時、「今、1 番オススメな高級カメラはなんだ」と A さんが写真家に尋ねた。写真家は「ライカ M がお勧め」だという、機能もすごくシンプルでカメラの最高峰とのこと。もちろん、そのボディも、装着するレンズも凄く高額なもの。そんなカメラを買ってどうすると聞いたら、A さんは「良いカメラを買えば、1 枚 1 枚を大切に撮りたくなるから良い写真が撮れる。携帯のカメラで撮った写真は残らない」と言う。先輩たちは映画のことを写真と言います。今回の審査で多くの作品を拝見しました。残念ながらストーリを撮ることに追われているのか、写真として印象に残った作品が少なかったです。その中で、『湯を沸かすほどの熱い愛』、『ケンとカズ』はキャラクターのプロフィールがとても上手く表現されていて、いくつかの良いシーンが印象に残った映画でした。新藤兼人賞、おめでとうございます。

プロデューサー賞選考委員講評

日本映画製作者協会 理事：豊島雅郎（アスミック・エース）

本年度の新藤兼人賞プロデューサー賞は、『君の名は。』のプロデューサー、株式会社コミックス・ウェーブ・フィルム代表取締役川口典孝さんに決まりました。我々日本映画製作者協会（日映協）の基本理念は、相互扶助の精神のもとインデペンデント映画のクリエイターの発掘と育成、および、プロデューサーのスキル向上のサポートを続けていくことであると考えます。 川口孝典さんは、2002 年製作の『ほしのこえ』から 15 年以上に渡って新海誠という才能がいつか必ずや大きく花開くものと信じぬいてサポートし続け、”作品の完成度に貢献する”というプロデューサーとして、日映協のあるべき姿を 2016 年『君の名は。』の国民的大ヒットで具現化してくれた、当該年間プロデューサー賞に一番相応しい人物であると思います

【審査会にて選出・審議された作品】※自薦・他薦含む

山内ケンジ『友だちのパパが好き』『At the terrace テラスにて』、小路紘史『ケンとカズ』、江本純子『過激派オペラ』、中野量太『湯を沸かすほどの熱い愛』、横浜聡子『俳優 亀岡拓次』、真利子哲也『ディストラクション・ベイビーズ』、山本一郎『あのひと』、坂本礼『夢の女 ユメノヒト』、犬童一利『つむぐもの』、前田司郎『ふきげんな過去』、桃井かおり『火 Hee』、三浦大輔『何者』、山戸結希『溺れるナイフ』、福山功起『鉄の子』、後閑広『プロデューサーズ』、杉山太郎・利倉亮『シネマハワイアンズ』、片島章三『Happy Wedding』